なぜ物価は上るか

渡辺　弘

近年の消費者物価の異常な騰貴は国民生活特に食生活に大きな圧力を加えつつあり、今日、重大な経済問題、政治問題として、すべての国民の深い関心の的となっている。そこで、この問題について、国民経済的観点から考察してみたい。

一

近年の消費者物価騰貴には、次の三つの特徴がみられる。

(1)第一表から明らかなように、卸売物価指数はほとんど横ばい状態であったのに対し、消費者物価指数のみが昭和三十五年頃から加速的に上昇し続けた。すなわち第一表の(3)欄にみられるように、昭和三十五年の消費者物価の対前年騰貴率は三・六%であったものが、その後、年々上昇し、昭和三十八年には七・六%となった。昭和三十九年は三・九%にとどまっているが、これは公共料金等の政治的ストップのためと、前記騰貴率の計算が月々の指数の年平均値の比較の方法を採用しているためであろう。昭和三十九年の月々の指数の推移をみると、一月の一二二・二から上昇の一途をたどり、十二月には一二八・五となり、この間五・二%の騰貴率となっている。更に、昭和四十年一月には消費者米価の改訂と医療費の値上げという事情が加わり、指数は一三一・一となり、前年同月に比較して、七・三%の騰貴率を示し、その上昇趨勢は決して衰えていない。

(2)第二の特徴は、食料(穀類とその他食料)と雑費項目(保健衛生・交通通信・教育・文房具・教養娯楽・たばこ)の騰貴率が特に高いことである。昭和三十五年を一〇〇として、昭和四十年一月の指数をみると、「その他食料」は一三九・二で最も高く、次に雑費の一三二・〇、穀類の一三一・一が続き、住居、被服、光熱の順となっている。しかも、消費者物価指数算定における食料と雑費の二項目のウェイトの合計は七割強に達しており、これが近年の消費者物価騰貴をリードしている、といえよう。

(3)第三の特徴は、昭和三十六年九月から昭和三十九年に至る金融引き締め期間中(その間一時緩和されたが)にもかかわらず、加速的に上昇し続けたことである。

二

以上の特徴をもった近年の消費者物価騰貴の原因は、一体何であろうか。それと関連し

て、まず、第一の特徴である両物価指数の推移の間にギャップが生じる二つの可能性を明らかにしておこう。

(1)両物価指数算定に入る商品の価格水準の差は、主に小売マージンであり、このマージンが時間の経過と共に、卸売物価と異なる動きを示す場合に、ギャップが生じるであろう。しかし、物価騰貴の抑制ではなく、原因との関連において重要なのは、むしろ次の点である。

第一表　物価指数

年度	(1) 卸売物価* 昭和35年=100	(2) 消費者物価** 昭和35年=100	(3) 消費者物価の対前年騰貴率
			%
昭和33年平均	97.9	95.5	—
34年平均	98.9	96.5	1.0
35年平均	100.0	100.0	3.6
36年平均	101.0	105.3	5.3
37年平均	99.3	112.5	6.8
38年平均	101.1	121.0	7.6
39年平均	101.3	125.6	3.9

＊　日銀調べ
＊＊　総理府統計局調べ（全都市総合）

(2)卸売物価指数算定にほとんど含まれないものが、消費者物価指数算定に入っているために起る可能性である。たとえば、(1)野菜・くだもの・魚・肉・卵・牛乳などの生鮮食料品。(2)めん類・パン・つけ物・つくだ煮等の加工食料品。(3)家賃・土地代。(4)ふろ代・クリーニング代・散髪代・映画観賞料等の民間サービス料金。(5)国鉄運賃・電気料金・ガス代・授業料等の公共料金等はほとんど卸売物価指数には含まれていない。したがって、これらの商品の価格が他の商品価格と異なる動きを示すと、両物価指数にギャップが起る。そして事実は、主にこれらの商品の価格騰貴が、両物価指数の間に大きなギャップを生ぜしめているのである。

そこで問題は、大企業よりむしろ中・小・零細企業によって生産されるこれら商品の価格が、なぜ急騰したかにある。この原因を明らかにするために、以下において相当大胆な簡単化の仮定を置く。すなわち、卸売物価に入る商品は大企業または寡占企業の製品であり、消費者物価のみに関係する商品は中・小・零細企業の製品である、と仮定しょう。

さて、かかる中・小・零細企業製品の価格騰貴の原因は、それらの企業の労働生産性が技術的にか、資金的にほとんど上昇しなかったにもかかわらず、貨幣賃金率を大幅に引き上げねばならなかったことにある。そして製品一単位当りの労働費用が上昇し、それを価格上昇に転嫁して、利潤（率）を維持しょうとしたためである。では、なぜ中・小・零細企業の貨幣賃金率を引き上げねばならなかったか。それは労働生産性の上昇の大きかった大企業が寡占状態（一市場が少数企業によって占められている状態）にあり、製品一単位当り労働費用節減にもかかわらず、価格引き下げ競争のメカニズムが充分に作用せず、価格が安定的であり、かつ大企業の労働組合が強力で、費用節減、利潤増大傾向を絶えず相殺する方向に、貨幣賃金率を引き上げて行ったためである。しかし、それだけでは中・小・零細企業の貨幣賃金率の急騰を説明することはできない。なぜならば、もしも、多数の

（潜在的）失業者が存在しているとすれば、中・小・零細企業は必ずしも大幅な賃幣賃金率の引き上げなしに、必要な労働を確保でき、製品価格の急騰なしに生産を続けることができたであろうからである。しかし、事実は高度経済成長を背景として、小・零細企業は昭和三十年頃から漸次若年労働・女子労働の確保困難となり、特に、池田内閣の超高度経済成長政策により、その困難性は急激に増大した。そこで相対的に低水準にあった中・小・零細企業の賃幣賃金率を大幅に引き上げていかざるを得なくなったのみならず、その上昇率は大企業のそれよりも大きく、賃金格差は縮小して行ったのである。ここに、中・小・零細企業製品の価格騰貴の基本的原因があるといわねばならない。

ある分野における生産性の上昇によるコスト・ダウンは、もし競争メカニズムが作用しておれば、価格引き下げを惹起し、その製品を使用する他の企業のコストを下げ、価格下落をもたらし、すべての利潤と賃金を、賃幣価値において同一でも、その実質価値において引き上げていくであろう。かくて、ある分野における生産性の上昇の恩恵は国民経済の他の分野にも与えられることになる。これが競争タイプの配分方式である。ところが、寡占状態にある大企業の生産性の上昇の効果はその企業の価格の硬直性と労働組合の賃金引き上げによって、その企業関係者（企業者と労働者）にのみ配分せられ、直接的には他の企業関係者には与えられない。ただ間接的にのみ、生産性の上昇のない企業の価格引き上げと賃幣賃金率の引き上げによって、かれらの実質所得を高めると共に、生産性の上昇した大企業関係者の実質所得をそれだけ低めることによって、技術進歩の効果は国民経済の全分野に波及して行くのである。これを寡占タイプの配分方式と呼んでおこう。しかし、多数の（潜在的）失業者が存在する時には、中・小・零細企業の賃幣賃金率と価格との引き上げを必ずしも必要とせず、物価は一般に安定的であろう。そのかわり寡占企業の生産性上昇の恩恵はこれら中・小・零細企業関係者には与えられず、一部大企業関係者に与えられるにすぎない。

かく考えると、寡占タイプの配分方式を前提とするかぎり、物価が安定的で、生産性向上の効果が一部大企業関係者に限定されるよりむしろ、消費者物価が騰貴して、生産性向上の効果が国民経済全体に分散される方が好ましいといわねばならぬ。しかし、このことは物価騰貴そのものを是認することを意味しない。

ところで、中・小・零細企業の価格引き上げのためには、単にコストの面のみならず、需要面からの支持をある程度必要とするであろう。しかし、この面も前記の生産性上昇のアンバランスと無関係ではない。一般に生産性の上昇は投資支出を通して起るのであって、この投資の二重効果、すなわち生産力効果と需要効果という二つの効果の波及範囲の相違について考える必要がある。膨大な投資が大企業中心に行なわれると、その生産力増加の効果はその大企業のみに与えられるのに対して、その投資の需要効果は、投資乗数の理論が明らかにするごとく、資本財産業のみならず、消費財産業にも、したがって全産業に波及していくのである。そこで、あまり投資が行なわれない中・小・零細企業では、生産性も生産能力もほとんど増加しないのに、需要増加だけは大企業なみに受けるため、需要面からも物価騰貴のための下地が整ってい

たわけである。

以上は消費者物価騰貴についての基本的説明にすぎないが、それによって卸売物価の安定性と食料・雑費を中心とする消費者物価騰貴の原因が明らかにされると共に、過去数年間の金融引き締め期間中も、その程度の引き締めならば、構造的に消費者物価が騰貴し得るであろうことも解明し得た、と考える。

三

次に、近年の消費者物価騰貴と現代資本主義経済との関係に触れておこう。消費者物価騰貴の根本原因は労働生産性上昇のアンバランスにあった。このアンバランスは商品の性質上、技術的に容易に生産性を高め得ないもの（教育・医師のサービス・散髪等）がある以上、ある程度止むを得ない面もあろう。しかし、いま投資によって技術進歩ないし生産性上昇が起るものとすれば、資本が安定性と高い利潤率を求めて行動する限り、資金調達の容易な大企業ほど生産性上昇が大きくなることは必然であろう。ところで、生産性上昇によりコスト・ダウンが可能であってさえ、価格が下落しないのは、企業の寡占化と労働組合の存在のためであるが、両者共現代資本主義経済の大きな特徴であるとすれば、生産上性昇にもかかわらず、価格の安定性は不可避であろう。

更に、資本不足による多数の（潜在的）失業者が存在した時代から、若年労働を初めとして労働逼迫の時代への移行は高度経済成長の結果であり、その限りにおいて生産性の上昇の少い中・小・零細企業の商品価格の騰貴は、日本資本主義経済発展の必然の結果である、といえるであろう。

このように考えれば、近年の消費者物価騰貴は、基本的には資本主義経済発展に深く根ざした構造的物価騰貴として捉えねばならぬであろう。

だからこそ物価の上昇趨勢は欧米先進資本主義国共通の現象なのである。昭和三十年を一〇〇とした場合の昭和三十七年の消費者物価指数は、フランスが一四三・二で特に高く、次にイギリス、日本、イタリーの順となっているけれども、この七年間の消費者物価指数と卸売物価指数の間のギャップは日本が一九・四でトップ、次にイタリー、西ドイツの順となっている。これら三国のギャップが相対的に大きかったのは、相対的に過少な資本を特定部門に集中的に投資したことによる生産性上昇の相対的に大きいアンバランスの結果ではないだろうか。日本ではその上超高度経済成長政策により、労働過剰時代から不足時代への転換期が重なり、昭和三十五年頃から他に例をみないほどの消費者物価のみの騰貴が起った、と思われる。

四

最後に、物価対策について考えておこう。近年の消費者物価騰貴が構造的である以上、その短期的抑制は極めて困難であろう。極端に厳しい金融引き締めによって可能であるかもしれないが、それはあまりにも大きい犠牲を伴うであろう。むしろ長期的に、投資の分散による生産性上昇のアンバランスの緩和、独占禁止法の徹底的適用による大企業間の競争メカニズムの活発化、流通革命の推進と経済の適正成長率の維持等によって、物価の全面的安定が得られるのではなかろうか。

（経済学部助教授・経済原論）

道

太田藤一郎

一つの結婚風景――彼は同志社の英文科を卒業した。母は高知の田舎で豚を飼い、その収益を、妹は工場で働きその給料の半分を彼の学資として送った。もちろん彼もアルバイトをした。家庭教師、映画のエキストラ、彼の頭髪は薄くなった。好人物であり、性格は明るかった。話し上手の彼は、よく私の子供たちに「ズラの良い」話をした。カズラの似合う男前のエキストラ、すなわち彼自身の悲しいアルバイト談なのであった。彼はよい母に、よい妹に支えられ、善意のまなざしで人生を明るくみつめながら勉強にいそしんだ。彼は谷脇といった。彼が高校教師として高知に帰っていくとき、私は彼に「君も頭髪のあるうちに結婚しなさいよ」と言って別れた。それから二年後、彼は高知の公民館で結婚式を挙げることになった。花嫁は看護婦さんである。貧しい彼には結納金の工面もつかず、世話人もきめられなかった。金のない結婚式にさぞかし彼は淋しい思いをするであろうと考え、私は高知まで出向いた。これ幸いとばかりに彼は私を媒酌人にしてしまった。彼も彼女も幸福そうであった。記念写真は彼自身が撮影した。彼が花嫁の横に坐っていないことにだれも気がつく者がなかった。花婿のいない彼の結婚写真をみて、時々私の子供たちはうれしがる。披露宴は公民館の畳の上に坐って、折詰べんとうと二合びん一本。出席者は学校の同僚たち。心のこもったスピーチと即席のコーラス。まことに彼の性格にぴったりと合った。なごやかな披露宴風景であった。その夜私は彼と彼女との三人で食事を共にしながら、人生について語り合った。同志社に学んだ彼には、そのとき既に一つの歩むべき道が身についていた。彼はそれを意識していたか、いなかったか、私にはわからない。近頃豪華な披露宴

に出席することが多くなるにつれて、そのむなしさを痛感し、私はいつも彼のことを想うのである。

ある学生の若き日の肖像――彼は同志社の予科生であった。時は日支事変、軍国主義が風靡していた。その頃、社会大衆党総裁であった安部磯雄先生の講演がチャペルであった。「私は東京で妻とアパート暮しをしていますが、私は社会的な地位も名誉も金もいらない。ただ私は社会の皆さんが幸福になれるようにと念願して、一生懸命に働かしてもらっているだけである。天国で新島先生にお会いしたとき、安部よくやったと先生からおっしゃっていただければ、それで私は満足である」ということを言われた。白髪の安部さんの頬には涙が流れていた。安部さんをここまで教育された新島先生の偉大さにその学生は感動した。そして同志社をやめようかと迷っていた彼の心をひきとめた。その学生は実は私なのである。英文科を卒業したとき、同志社に残るようにと力をつくして下さったのは、今の上野直蔵学長その人であった。上野先生は同志社を愛し、正しさを愛する信念が非常に強い新進気鋭の人であった。私はもし安部さんの講演を聞かなかったなら、また上野先生に教えをうける機会がなかったなら、恐らく同志社に職を奉じてはいなかったであろう。私の一生の道はこの二人の先生を通して、新島精神によってつけられてしまった。まことに不思議なことである。間もなく勤続二十五年になるかもしれない。私のこの道は真直な道であっただろうか、また曲った道であっただろうか、私自身にもはっきりとはわからない。

ある新緑の風景――一科目おちたために卒業出来なかった女子学生がいた。随分と悲しんだ。その学生に私は「人間の一生の道はながい、僅か一年間のまわり道をするくらい大したことではない、後になればこの辛さは忘れるものだ、平坦な道ばかり歩けるものではない」と説得したけれども、遂に彼女は退学して卒業を完遂しなかった。彼女がどういう道をたどって行くのか誰にもわからない。毎年早春の卒業期には辛いことが多い。この頃から春の落葉がしきりにはじまり、春嵐は激しさを加え、道にはまだ青い色を残した落葉が吹きとばされていく。こういう時の道は何かしらじらしく、ほこりっぽい印象を心にやきつける。このいらだたしい不安な感情は、しっとりと濡れた新緑の風景の誕生を迎える陣痛にほかならないのだろう。水原秋櫻子の句だったと思うのであるが、

若葉道思わぬ方にまがりけり

というのがあったように記憶している。新緑の頃になると毎年この句を憶うのである。この道は果してどういう道であろうか。たのしみなことである。（四月十六日）

（文学部教授・英文学）

大学の開講

足立宇三郎

1

同志社大学は大正元年二月二十四日、専門学校令により設立の許可あり、四月十五日に同志社大学として、はじめて講義が開始された。この日午前九時、神学館楼上の講堂にて開講式を行なった。平素見なれた御所の森も、相国寺の籔の色も、ひときわ生気をおびているやに感じられた。

式は聖書朗読、祈禱、讃美歌の順にてはじまり、原田助社長の式辞、政治経済学部委員長徳富猪一郎、神学部教頭日野真澄、政経学部教頭水崎基一氏らの訓辞があった。

徳富先生の訓辞は、学生を警めて、曰く「学問の成就には良師なかるべからず、良書なかるべからず。けれども、朋友切磋琢磨するの一事を欠いては、達成は期し難い。徳川時代先哲の苦学力行は、以って殷鑑となすに足る。諸氏もっとも努めよ」とのことにて、二三儒者をあげて説明し、時にとりて適切なる言葉であった。

同志社には、この新大学に先行して、神学校（修業年限五ヵ年）、同志社専門学校（経済科と英文科を有し、修業年限三ヵ年）を経営していたため、実際上、新大学は前記学校の継続であり、修業年限を予科一年七ヵ月、本科三ヵ年に改組したものであった。当時の慶応も早稲田もまた同様であった。

その時の各部の教授陣を一瞥すると、神学部の方は、宣教師の教授としてラーネッド、ギューリック、ケーリ、カァブの諸氏あり、邦人教授には日野真澄、芦田慶治、河中勘之助、速水藤助氏らあり、それに京大文学部から二、三の講師が見えていた。

政治経済学部のうち経済科は、教頭水崎基一（経済原論、英国産業史）、米田庄太郎（経

済原論)、中川精吉(商業学、簿記)、和田琳熊(西洋史)、飯塚恒太郎、浦口文治、ロンバード氏らが英語を担当された。政治科は、授業は大部分、経済科と合併であったが、本科になって、蜷川新博士の就任あり、国際法と外交史を担当された。

英文科は前記の飯塚、浦口、ロンバード氏らが当り、講師として上田敏博士がみえていた。

第一回入学の学生数は神学部約十名、経済科が約五十名、政治科が約十名、英文科約十名であった。

講師として京大法学部、経済学部の諸先生が来援せられ、田島錦治(経済原論、財政学)、小川郷太郎(経済原論)、河田嗣郎(農業政策、社会学)、山本美越乃(工業労働政策、殖民政策、外国為替論)、財部静治(統計学)、中島玉吉(民法)、市村光恵(憲法)、辟道文雲(商法)。

予科の講師として鈴木虎雄(漢文)、日野真澄(論理学)、河中勘之助(ドイツ語)らの講義があった。

2

このようにして、大学開校後、予科一年七ヵ月と本科一年を終えて、二年に進学した時、晩春の一日、経済科第一回生が親睦会をひらき、席上、学校の現状および将来につき意見を交換したところ、種々議論が湧き、結局、それを三ヵ条にまとめて、学校当局に要望することとした。すなわち

一、速かに大学長を選任すること。
一、専門専任教授を増員すること。
一、図書館を充実すること。

この三ヵ条に説明を加えた要望書をつくり、水崎教頭のもとに提出し、また原田社長とも交渉した。さらに委員を東京におくって徳富委員長と交渉し、委員長の旨をふくんで三宅驥一、古谷久綱の両政経部委員と話合った結果、建議の趣旨は了解されたが、このような場合、実施には学校側にも事情と順序があり、簡単に確答の出来ないものである。そのため交渉は四十日余にわたり、その間に昂奮する者も生じ、不幸にして十三名の学生の退学処分をみるに至った。

しかし学校は学生の希望にそい、新たに教授陣を充実し、経済科に滝本誠一、助教授に阿部賢一、藤谷光之助、組谷定治郎氏らを招き、政治科の方は、かねて来任の約束のあった蜷川新博士が就任された。一方、米田庄太郎教授は、この運動中、学生側に加ったとの浮説のため同志社を去られた。

そもそも、このような運動の起った遠因は、同志社では大学は開放したが、大学設立の計画に伴なう教授を養成していなかったから、本学としての独自の教授陣を構成出来なかったのである。さいわいにも京大より諸先生の助援が得られたので、当面の授業は出来たのである。しかし講師の授業は、自然に、その人の専門学科の講義となり、本学として独自の系統的学課配置が出来なかったのである。ここに一例をあげれば、経済原論の講義は水崎、米田、小川、田島諸先生が講義され、かつ、おのおの緒論、生産篇の順序にて講述されるため、原論全般に及ばずして、いたずらに同一部分が重複したのである。このような状況により、学生側より改革を求めたのであった。

さて新教授の来任によって、滝本先生は日本経済史を、藤谷先生は貨幣銀行論を、組谷先生は会計学(吉田良三著会計学)を、それぞれ担任された。政治科にあっては蜷川先生

が国際公法（高橋作衛著国際公法を用いた）と外交史を担任され、講師佐藤丑次郎氏が政治学を、冨田山寿氏が刑法を担任された。それにしても、なお、当時として、就職に必要な貿易手続、関税政策、保険、商業作文、商業算術等は学生の学びたい学課であったのである。

3

なお、経済科の講師であった京大の諸先生について少し述べておきたい、元来、講師となると講義に熱意を欠くごとくうけとられがちであるが、田島錦治、中島玉吉の両長老教授はその重厚なるお人柄をそのままに、懇切なる授業にうつされ、中島博士の民法の講義のごときは総則より物権、債権にまで及んだ。また当時、助教授にして年壮気鋭であった河田（元国民新聞記者）、山本（校友）先生らの熱意に満ちた授業、また土佐出身の市村博士の片岡、西原先輩の遺業としての本社のためにつくされた学生への指導、好意は、ともに記憶すべきものかと思う。

また別に記しておきたいことは、大学発足の当時、浮田和民博士と山路愛山氏が教授のうちに名を列ねて毎月一回入洛し、二時間づつ講演せられた。浮田先生は早大の政治学教授であると共に、雑誌「太陽」の主筆にて、その巻頭の論文は日本の与論を代表するものであった。同志社での先生の講演は、西洋上古史―ギリシヤ・ローマ史―を通じて、政治の終局的型態はデモクラシーにあることを説明するにあった。先生は清朝の末期に、支那分割論の横行したとき、卓然として中国には民主主義を目標とする政態の起ることを予言されたのであった。山路愛山氏の講演は、同氏が評論界において異色ある存在であったと同様に、特色を有し、すでに「人物代表日本史」にてその史観を明らかにしておられたごとく、日本史の変遷を経済面のうごきによって解釈せんとするもので、当時において他にそのような道を進む人はあまりなかったのであった。また徳冨先生は寺内朝鮮総督の新聞対策に参劃して、毎月東京京、城間を往復し、帰途には京都で下車し、しばしば学生の前に立って興味ある講演をして下さった。たとえば「英国議会演説史」という題で、グラッドストン、ソースベリー、アスキズ、ロイド・ジョージらにいたる議会における活動、演説を眼前に展開するように話された。このような話は先生のもっとも得意なもので、先生は高価をおしまず古いロンドン・タイムスを取り寄せて、読み耽ったそうで、ロンドン・タイムスは先生の知識の取入れ口であったらしい。

外来者の経済関係の講演には、福田徳三氏が来て経済学の起源について話した。氏は、経済学の起源は伊太利にて生れた複式簿記の勘定科目の方程式計算から出る損益の観念から展開したと説明し、一部の学者の経済学はアリストテレスの政治学から出発したとする説に批判を加えた。また深井英五氏は日銀副総裁のときに来校され、国際金融市場の実態、日々の動きがどういう風に行なわれているかについて現実に為替相場の変動にふれて説明された。

また、珍らしい人では、フェビアン協会の創立者の一人で、倫敦倫理経済学校の教授シドニー・ウェッブ夫妻がみえて、神学館講堂で内々の講演をされた。当時の内務大臣は大浦兼武氏で社会主義の社の字も大きな声で言えなかった時代であった。バートランド・ラッセルも船の窓から日本を見て、通過して米

国へ行ったような時代であった。京大の河上肇博士は、同志社専門学校の時には経済原論を講義されたので、村田校友会長も聴講した一人だと思う。

4

最後に、経済学部の諸先生はどのような内容調子で講義されたかを少し書き足しておきたい。先生方の使用された教科書、あるいは著書が残っているので、それらを開くと、なお五十余年前の講義のにおいを今も嗅ぐことが出来るからである。

まづ水崎基一先生は、その訳講の書物として

Outlines of Economics. by Richard Ely.
English Industrial History by W. Cunningham.

を使用された。学生は日々予習して来り、数節づつを訳出すると、先生が必要な補足をされつつ進行してゆくのであった。

米田庄太郎先生は

Economics of Industry. By A. Marshal

を使用された。先生の場合は学生の訳出をまたず、先生自から訳しながら、主として内容の理解に重点をおいて進行された。この書は内容がむつかしいので、先生をもってしても徹底した説明をしようとすれば、少々の授業時間では足りなかったと思う。先生は社会学者であったから、この書の講義中にも社会学の角度から眺めた箇所に接すると、必らず興味ある説明をして下さった。例えば、人間は"Desire for superiority"の念を持っている。そして平均より少しでも優れたものが現れればそれに向って全体が平均せんとす。ここに社会進歩の原因がある。流行なるものはこの社会法則の一つであって、一人が真珠のネックレスを飾ると、他の者がこれに追従してくる。しかし資力的にほんものの真珠が買えないものは模造真珠で満足する。商売人としては模造真珠の流行に乗ずるのが、商売の秘訣であると。

河田嗣郎先生は

Sociology　By Kidd

河田先生はなぜ社会学を講ぜられたか。先生は頭がよく、どの学科でも講義の出来る人であったから、進んで社会学も講義されたものと思う。われわれは先生の試験については困ったのであるが、先生は試験時間に教科書を教室へ持って這入ってよろしいといわれ、問題は六題にて、うち三題を選んで答案を書きなさいと。さてその六題の問題を黒板上に見詰めてみるといかにも学んだ範囲には相違ないが、どれを取ってみてもおいそれと書けるものはないので、学生は溜息をつくのみであった。

和田琳熊先生は、

European History, Modern Age. by Myer

を指導されたが、これは歴史の知識と共に英書の読書力養成に主眼をおかれておいた。

他の諸先生には、当時の講義と同じ内容の著書を残しておられるから、その書名をかかげておきたい。

田島錦治先生　経済原論。先生にはほかに「賃銀と利潤」、「経済と道徳」ごく初期のものに「社会主義」の著書があった。

滝本誠一先生　日本経済史。この書は本大学の講壇に立ってはじめて書きおろされたものである。

河田嗣郎先生　農業経済論。先生は農業政策の主軸に自作農の創設を強調された。この農業政策の講義者は、一度も土にも肥料にも

手を触れなかった人であったことは学生間の笑いばなしであった。先生は本学にて後年、原論を講述せられ「国民経済学」として出版された。

山本美越乃先生　殖民政策。先生は京大にて、児玉紀念殖民政策講座を担任して居られた。同志社普通学校より京大選科を経て、ウイスコンシン大学にて、ラインシュ教授につき、殖民政策を研究された。徹底的な努力家であって、あるとき学生に、諸君は焼芋屋よりはじめて独立経営せよといわれたことがあった。デビス著「新島先生伝」の訳者である。今は若王子山頭に眠っておられる。

中島玉吉先生　民法釈義。民法全般のコンメンタリーにて、総則、物権、債権が先生の執筆にかかり、かつわれわれの受講した部分に相当している。

市村光恵先生　憲法提要。

同志社大学が百人未満の学生にて開校し、今日の隆盛に達したのは、新島先生はじめ先輩の余徳によるが、一つには時勢の変化による社会の恩恵でもある。しかし、ここにその発芽期にあたって本学のためにつくされたる諸先生の好意と努力に対しては山高水長、ながく記憶したい。また大学改革運動のため退学処分されたる諸君は、本学のため地下の礎石となった人々にて、これまたながく同情にたえないものがある。（大正五年大学経済科卒）

第一回入学生の反省

秦　孝治郎

同志社大学の看板が掲げられた感激は、私どもの第一回入学生よりも、この創立に絶大な苦心を重ねた、政経部創立委員長の徳富猪一郎（蘇峯）氏や幹事長水崎基一氏を始め、理事の方々がどんなに嬉しかったかを推察することが出来る。

明治四十五年五月二十日の開校式には文部大臣長谷場純孝、京都府知事大森鐘一、京大総長菊地大麓氏の臨席があり、原田助社長を中心として創立委員長や委員方がシルクハットを冠っての偉容は第一級の豪華荘重な儀式であった。それは専門学校と神学校を合併した専門学校令に依るものではあったが、私共より一年か二年の先輩で、東都に上り第一高等学校に入学していた谷岡勝美君やその他の大学に合格していた満永寅一君などの秀才が、第一回の入学生として走せ参じ、当年の同志社普通学校の出身者と同じ位の数が他校から入学して、その学力は相当なものではなかったかと思う。

しかも教授陣では、徳富委員長の斡旋で異色の学者を迎えることが出来た。日本経済史の滝本誠一、政治学の蜷川新、経済学史の櫛田民蔵、財政学の阿部賢一、経済原論の藤谷光之助、社会政策の波多野鼎、英文学の浦口文治、経済政策の山本美越乃氏のごときは出色といってよい。また、京大からは上田敏、河田嗣郎、滕道文芸、田島錦治、中島玉吉、市村光恵氏など立派な講師としての応援があり、東京からは山路愛山、浮田和民、松本亦太郎、安部磯雄氏などの集中講義があった。

学内では水崎基一、中瀬古六郎、米田庄太

郎、日野真澄、芦田慶治、ラーネッド、ケーリ、カーブ、ダンニング、デントン氏のごときが間接直接の感化を与え、今からいっても粒選りの学者揃いであった。

しかし、新しい設備としては目星しいものがなく、ただ山本唯三郎氏贈るところの図書館も虎大臣の失脚から工事の中止を喰い、僅かに致遠館が出来上ったくらいである。女子部の方は栄光館、家政館、ジェームス館、清和館などが林立するのと対象し、新入大学生は不平満々だった。

そこで、入学そうそうの猛者連中が、うさばらしに懇親会を山端の平八で催すこととなった。当時筆者は級長だったから、飲食だけでは物足らず、希望の条項を三つばかり書き上げた。曰く、経済科主任教授の急聘、曰く専門専任教授の増聘、曰く、経済科図書室の設置、などを並べた。

誰一人反対する者がなく、立ちどころに賛成々々で学校当局に要求することにまで発展した。そしてその要求書のうちに「学校当局者は迷へる羊の如く」という形容詞が含まれていた。意気揚々と水崎教頭の許へ提出したところが、先生は烈火のごとくに激怒された。これを削除せよとの仰せである。また、原田社長に対しわれらの要求を期限付きで回答を迫まったが、これを拒否せられた結果、日一日と学生と学校側は対立し、遂に一種のストにまで発展した。この時筆者はルボン著「群衆心理」二巻を読み、しかも眼の前に展開する、集団行動に現われた第二人格の姿に愕然とした。

（理事長）

俺は俺だよ

品川義介

思えば同志社大学を、退校されてから既に五十年以上になる。そして今年は僕も七十七歳になった。その上金婚式の当年である。

『なき笑ひ、お手々つないで、五十年』

と言う所だ。しかし身体は珍らしく健康で、頭は緑の黒髪一本の白髪もなく、歯も全部揃うて居り、むし歯は一本もない。明治四十五年の事である僕が普通校を卒業した時、ちょうど同志社大学が創設されたから、これをもっけの幸に直ちに無試験で予科へ入学した。そして間もなく大正三年三月に、ストライキをぽっぱじめ、六月にこぎみよく退校された。そこで直ちに本能寺へ行って、明智光秀の乱を想及しながら、友人と別れて僕は故郷へ帰った。ただし退校されたと言うものの実の所は『品川君の様な立派な学生は、何も普通月並のぼんくら書生と共に五ヵ年も在校する必要はない。どうか両三年早く、学校を出て載いて、国家社会のために、働いて貰いたいと、学校からの懇請もだし難く、出てやったまでの事である?』

とにかく僕は学生時代から、余程始末におえぬものであったらしい。思うに『三ツ子の魂百までも』で、最早八十に手のとどく、老人になってもまだ子供のような奴で、いささか自分を持ち余して居る。僕が同志社大学に入学した当時は、昔の図書館の一室で、授業をうけたものだ。そして教師には、母校の先

生であった水崎基一先生や、中川精吉先生や、米田庄太郎先生がおもだった方々で、その上補助教師としては、京都帝国大学から、小川郷太郎先生や、市村光恵博士等がこられて、この先生方から講義を聴かされたものだが、僕にはてんから解らなかった。そして時には課外講演として、東京から浮田和民、山路愛山、徳富猪一郎等々の大先生等が来られて、説教をせられたものである。今までの普通学校時代は、実際において新島襄先生のいわゆる同志社スピリット一点張りの教育を受けたものだが、そこへ持って来て全国から各学校の落武者共が、入学した事によって、全く今まで習ったキリスト教的教育に水を増して薄くなったようで、その特徴さえ失った観がしたものだ。しかし何と言っても僕たちは、明治三十八、九年から、約五ヵ年普通学校時代に純同志社教育を授かった事は、とにかく今日まで、忘れることの出来ぬ深い印象として、焼き付けられて居る。要するに同志社大学在学当時は、いわゆる僕としても青春の血に燃えて居ったものだ。所がもう母校を出されて、驚くなかれ五十年になって仕舞った。その上同窓の友人共も大半死んだようであるが、僕は幸いにして身体は非常に達者で、気持ちもすこぶる若く、まだこれから二十年は、むつかしかろうが十年位は、大丈夫に思って居る。さて翻って考えて見るとも、他にほめる所は何物もないが、ただ純粋な個人雑誌たる『野人の叫び』を創刊以来二十七年間継続して来た事と、社会生活六十年間を全く自主独往でこの経済多端な人生に体当りして、まだかって人に使われた事がなく、従って月給を貰った事もない。そして今日は読書と執筆と盆栽の手入れ位に自らを慰めて居る。まず悠々自適して晩年を楽しんで居る。

『達摩はだるま、ヤソはヤソ、俺は俺だよ、品川義介』とこんな勢で、この世はおろか、地獄の鬼退治の下準備をやって居る。

（「野人の叫び」主幸）

存在理由の明確な大学

柳島彦作

想い出はすべてのものを美化すると言います。私のこれから書こうとしていることも一種の想い出でありますから、あるいは美化されているかもしれませんが、出来るだけありのままを書いてみましょう。私は開設当時の大学を思い出すたびにどうしても忘れることの出来ないのは、当時の先生方と学生との人間的な関係とでも言うことです。私たちはよく水崎先生、飯塚先生、嶺岸先生、浦口先生、和田先生、中川先生、ロムバード先生、滝本先生などのお宅をお訪ねしてはいろいろのお話しをうかがい、ごちそうになったりしたものでした。そうしてこうした先生方との親しい交わりが私たち学生に誇りと自信と、よろこび、とをあたえまたこれが学生々活の活力の原動力となっていたのであります。

私はこの時代の同志社の特長の一つに学生相互が勉強をともにしたと言うことを挙げることが出来ると思います。私は経済学部（当時の政治経済科）の学生であったのですが今

同志社史料研究所にて貴重な史料の整理をしてをられる加藤延雄氏とシェイクスピアの「ハムレット」や「ジュリアス・シーザ」を字引と首引しながら勉強したことやロートレッジ版のあのごついスミスの富国論を読了したことなど到底忘れることが出来ません。

私共はまた時間さえあればよく遠足に出かけたものです。今どきにこんなことを言うてみて——まるで犬の遠吠えみたようなものでしようが、ウメボシ一つまんなかにちょこんとはいっている弁当をもって東西南北至るところを歩きまわったものでした。その途中いかにも得意になって「マーカンチリズム」と「フィジオクラチズム」の比較論をやってみたり、島崎藤村の文体について話し合ったりしたものでした。それから土曜日ともなれば朝からビワコヘボートの練習によく出かけ、その時にはいつも牧善之助君（他界されました）がリーダでもあった——石山寺の上空に満月がかかるころに大津までかえり、それから山越えで京都まで歩いて帰ったことなどほとんど土曜日毎に経験したことでした。これらのことは活々とした想い出として今だに七十二歳の老人の私をはげましてくれます。

私どもは同志社こそ「レーゾンデートル」の最もはっきりした大学であると信じていた。そして今でもまるでアホの一つをぼえのようにこれを信じている。同志社は学生数においてもその「スケール」においても第一流の大学になった。これはたしかにうれしいことであります。けれども同志社はどんな姿になっても最も存在理由の明確な大学であってほしい。どこまでも前進し新しい建設をつづけてゆく堂々たる大学であってほしいと祈ります。

最後に私は母校同志社のおかげにて「クリエイティヴライティング」や英語表現法を教えています。この方面についても私は一つの考えをもっていますが、これについての研究発表はもし生きていればまたの機会にゆずりたいと存じます。終りに母校の本質的な発展を念願しながら筆をおきます。

（梅花女子大学教授）

わがカレッジライフ

奥村龍三

同志社大学は本年が創立五十三年目になるとのことですが、最初の二年すなわち私共のクラスの次の年度とは大学卒業となっていても、旧専門学校規定によるとの但書がつくのは当然で、もともと私共は三年制の専門学校に入学したので、在学中に当局の斡旋で大学に昇格になったのですから、私共在学生は妙な気持でありました。ですから同志社大学の大学生らしい卒業生を出したのは大正五年の奏理事長のクラスからと言うべきでしょう。

そんな事情でしたから、当時の学内の実情——教授陣や学科内容も整備充実の途上にあったと言えましょう。教授、講師陣は同志社専任の諸先生の外に京大の新進の助教授河田嗣郎氏、河上肇氏また上田敏先生のごとき方々の応援でようやく体裁を保っていたのでし

た。英語のクラス等も英文科や神学部の生徒との合併授業で実力に大きな差異があったのも当然でした。

それでも気の早い連中は大学になったのだからとて、水崎基一校長を促して大学の制服制帽を作ってもらったりしていました。

ただし私共半数以上のものは大学でも但書き付きだからと言うので角帽をかぶらなかったのです。「猿猴冠す」の自責の感情が幾分あったと思われます。その制服・制帽も大正三年組くらいから皆が着用に及んだので自然に身について来た感じでした。運動体育、音楽等々この学友会の活動もだんだん活発になり、いわゆるカレヂライフを楽しむ事になりかけたのもその頃でした。

水崎先生が教室でたびたび私共に「君等は大学生と言っても直ぐ月給取りになって会社銀行に奉職するのだから社会で間に合うためには算盤や簿記を勉強して置かねばならないと警告された」。その月給取りになると言う一言が妙に耳ざわりに感じとられたほど当時の学生はまだまだ衒学的なものがあったのだと思われます。

（関西国際学友会館々長）

大学開設運動における二三のピーク

大塚節治

同志社大学は明治四五年（一九一二年）四月から開設され、その式典は同年五月二〇日に行われた。そこに至るまでには両三年の間、同志社当局と校友との間に熱心な募金運動が行われた。私は洽度神学校に在学し、六寮の寮長をしていたので当時の模様が記憶に残っているし、また興味ある二、三のことを日記に記している。いまは同志社大学開設の正史を書く時間も紙白もないし、また多分、たれかがそれを書くものと思うから、私は二、三のエピソードと言ったものを記すこととする。

私の日誌によればこの運動の盛上りの第一は明治四二年（一九〇九年）一一月三日の校友会大会の決議であった。一一月三日天長節（明治天皇誕生日）の午後、神学館（クラーク記念館）講堂で校友会大会が開かれた。専門学校経済科教授、[註(1)]水崎基一先生が司会し、武田猪平先生（総寮長）が祈祷を捧げ、原田社長が学校の現状を報告した。その報告のなかで専門学校充実のためは普通学校卒業者を大部分引着入学せしめるだけの内容を充たすこと。同志社で教育を完成し、他校を通さずして直接に人材を社会に送り出し得るようにすること、以て新島先生の遺意を貫徹すること、そのために三〇万円の基金を必要とするが故に校友諸君の支援を求めるという訴えがあった。

次いで浮田和民博士が立って、早稲田大学のため新島先生の郷里群馬県に行って募金の訴えをなしたときは実につらかったと涙を流して語り、出席者一同を感激せしめた。次いで校友選出の新理事水崎基一先生が一場の挨拶をなし、更に神戸の校友森田寿三郎氏が石狩川の鮭が稚魚のとき川を下って大海に入り、成魚となってまた元の川にかえり来るごとく校友も母校を出てまた母校にかえりくる

と含みのある卓話をなした。そのときの大会の決議は次ぎの通りであった。

決議文

四十年一月原田校長来任以来校運隆昌となる。今や一歩を進めて大学建設準備のため当局の提案を翼賛し募金に極力尽瘁せんことを決議す。

明治四二年一一月三日　同志社校友会大会

第二のピークは翌四三年（一九一〇年）三月二五日全学卒業式後の卒業生、教職員、校友、同窓合同の午餐会であった。席上、学校当局から三〇万円募金のことが発表せられ、神戸の校友畠山一郎氏一五〇〇円、同牧野友規氏一八〇〇円、理事川本恂蔵氏二〇〇〇円（後三〇〇〇円に増加）などの申込みがあり、大いに気勢があがった。

第三のピークは同年四月一二日夜における教職員に対する理事者のアッピールであった。私はこのときの光景を日記に特筆している。それは漢文句調で仮名づかいも古く今日の読者には読みにくいであろうが、同時に当時の気分がでていて面白いと思うが故に、そのままここに引用する。

「四月一二日午後六時より女学校に於て東京[註(2)]より水崎、浮田、徳富、古谷、三宅理事等、理事会のため来校せられしを機として会食をなす。[註(3)]八時前より別室に集り[註(4)]基本金寄附の件につき相談あり。先づ古谷氏立って同志社が天下に訴えて大学基金を募集し、[註(5)]而して大学を起す能はずして今日にいたれるはこれ天下を瞞着せしに等し、吾等何の面目あってか天下に向はん。先づ須く校友自ら些少の金にても募集し、以て社会に訴へざるべらずと熱説し、水崎氏簡単に今回の基金募集に関しての由来を語られ、徳富氏更に立って一時間半に亘る長舌快弁を以て明細に事件の来歴を語られ大に吾人をして快からしめたり。波多野氏立って古谷氏の言中瞞着なる言ありしは謹まれたしとて同志社大学の今日まで起らざりしは当局の罪に帰すかべらず、天下の時勢の然らしむるものあるのみならず、当局の赤心は大に見ざるべらずとて簡単に時勢の変遷を述ぶ。湯浅吉郎氏は京都の校友の治くこの件を知らざるは不行届なり、注意せられ度しと述べ、原田、古谷氏等の弁明あり、次ぎに原田氏、桂首相との会見の模様を語り、今回渡米するに就いては無為にして帰国せず、若し不幸無為帰国に及ぶときは社長の地位を辞すべしと確言熱述す。終りに日野氏立って吾人同志社に常にある者が不熱心なりしこと慚愧に堪へずとて嗚咽、言語断続す。言々、肺腑より出て吾人をして粛然たらしめたり。

最後に金額記入につき教職員多く帰へれり吾人快からず、各金五円宛[註(6)]を一年間に納めることとして記名す。一〇時半かへり来る。今日の事を記すは実に記さざるを得ざるものあればなり」

いざ寄附名簿に金額記入のだんになると、教職員の多数いつの間にか逃げ去って行った有様が窺える。われら学生の方が却って熱心であったようにみえる。

固々原田社長は同月一六日敦賀から乗船、ウラジオストックに渡り、シベリア経由、欧米漫遊、翌四四年（一九一〇年）二月二六日帰京された。

註(1)　水崎基一氏は明治二六年（一八九三）の普通学校卒業で、同期生、三宅驥一博士（元東大教授、同志社理事）古谷久綱氏（元伊藤公秘書、政友会幹事長、同志社理事）等と協力して大学開校運動の推進力の中心となり、水崎氏自身、募金のために献身した功労者である。氏を記念するため、大学開校五〇年に当り、

有志により水崎奨学基金（一〇〇万円）が九十周年記念事業部に寄贈された。

註(2) 会食の場はデントン邸であったと思う。かかる会食にはデントン邸がよく用いられた。というよりも、デントン先生からよく招待されたのである。

註(3) 学生であった我々が、理事者と食事を共にすることは当時は決して珍らしくなく職員は度々理事や社長の招きを受けた。

註(4) この会場は中学のチャペルであったと記憶する。日野先生は中央の列の後方にいた。先生が泣きながら語った光景が今尚私の眼底に残っている。先生は当時、口ひげをはやしていなかったと思う。

註(5) 明治二一年（一八八八）大学設立旨意参照。

註(6) 当夜は五円と記したが、あまり少額であったので、後程これを五〇円に改めた。今日当時の募金名簿が残っているが、それをみると「拾」の字を挿入している。われらの仲間、片桐哲、及川八楼、長谷川直吉、相馬祐次、佐竹直重等と同様に五〇円と改めている。

（前総長・神学部名誉教授）

全寮制の学園

片桐　哲

私が郷党の先輩山崎為徳氏や親父の学んだ同志社に憧がれて、普通学校に転学して来たのは、日露戦争の始まった年で、今から六十一年前の昔になります。当時の同志社は衰微の極で、男子と女子部とを合せても、学生数三百名を少々越すくらいのもので、丸太町が京都市の北の端で、御所をへだてた同志社は、少数の自宅からの通学生以外は全寮制で、同志社村を形成していたと言ってもよく、チャペルの鐘の音で起床から就寝まで規定せられていました。日曜の礼拝式も、金曜夜の祈禱会も、全校の卒業式も皆一所に守っていたものであり、今日の二万に余る同志社人には到底想像も出来ない家族的な同志社でした。入学して一番強く印象された事は、校祖に対する思慕の念が充満していた事です。卒業記念撮影などには必ずチャペルから新島先生の肖像額をはずして来て、それを中心に写真をとったものです。創立記念日や御命日の日の御墓前での早天祈禱会のごとき、また創立記念式で朗読さるる大学設立趣意書は遺言として拝聴したものです。志中途にして逝かれた校祖の遺業を、何んとかして成就しなければならないという熱意と祈願が漲ぎっていました。明治四十一年四月に、当時既に予科二年、本科三年の大学組織になっていた同志社神学校に進学しましたが、日清日露の戦争で世界の二大強国に勝利を博した日本が躍進の一途を辿る国運に伴って、同志社も原田助社長を迎えて衰微から復興への歩を始める事となり、明治四十三年頃ともなれば、同志社大学実現の気運がとみに漲ぎって来たように感じられた。大学設立の趣意書を天下に公表されて病軀を押して募金運動に出掛けられる際、新島先生がチャペルに立たれて、在校の少年たちにその事業の完成を委託された事に深く感銘させられた、古谷久綱、三宅驥一、水崎基一、近藤賢二氏らの一団は今や社会人として働き盛りの人物になっていられた。そういう校友たちが恰も火の玉のようになって燃え上り、校祖の遺志達成の運動に奮起されたのである。大先輩の国民新聞社長の徳富蘇峯氏を先頭に戴いて、三十万円、当時としては巨額の募金に立ちあがられたのである。それ

からはそうした方々が同志社本部との連絡のために頻繁に来校され、その都度チャペルの朝拝時や放課後などに大学設立に関する非常な熱感と懸命な奮闘振りに深く心を動かされたものであった。明治四十三年の五月のある夜、われら在校生の数名の者が女子部のある一室で催された徳富先生を中心の大学基金募集の訴えの会合に出席を許されたのであるが、先生のあの「二人同心其利断金、朔んや我同志社校友一千五百余名の熱誠なる一致戮協に於いてをや」の句で始まり「新島先生永眠以来二十年……単に先生の遺業をして萎靡不振に帰せしなるは是豈痛恨の至りならずや云云」の切々たる募金の訴に痛く動かされて、当時一ヵ月の食費四円五十銭也のわれら貧学生が、大枚金五円也の寄付を決意した署名したその夜の感激は今も脳裏に深く印せられている。その後、募金運動を天下に展開するに当り、その重要な奉加帳に金五円也という目障りの小額では困るという事で五の字の下に小さな拾の字を押入して金五拾円也と訂正した時に、どうしてこの大金を完納出来るだろうかと内心少からず不安に思った事も今に楽しい思出である。その署名した連中は上級の相馬祐次、長谷川直吉、同級の佐竹直重、年齢は上であったが下級の及川八楼、沖田節（大塚前総長）の六名であった。生存者は大塚氏と小生のみとなった、洵に遠い思い出である。明治四十四年の十一月の理事会はいよいよ明四十五年度を期して遂に大学開校に踏み切った。在校生一同は異常な興奮と光明とに満たされた。その勢は創立記念の当日頂点に達した。若王子山頂の早天祈禱会の司会者は神学生の前述の沖田節治君であり、集り来りし教師学生の捧げる熱烈なる祈禱感話は引も切らず非常な霊感に打たれたのであるが、特に原田社長が校祖の墓前に進み出て、厳粛な語調で理事会において決議したる大学設立の次第を奉告せられ、校祖の念願したるキリスト教主義による教育報国の理想達成のため同志社人の奮起と責任とを促された時の感銘は非常なものであった。それから下山して催された創立記念式における水崎基一先生の大学設立趣意書の朗読の際の感銘は、文字通り声涙共に下るの有様でいよいよ校祖の念願の大学開校の日間近しの希望に輝くものであった。原田社長は同志社大学開校の理事会の決議文を朗読されて全同志社人の協力と奮起を求められて式辞とされた。ワンパーポスの校歌で終って、同志社チーヤーを思い切り叫んだのを忘れる事が出来ない。明けて明治四十五年の二月には正式に同志社大学開校が認可せられ、学校当局者の多忙さと緊張振りとは在学生のわれらにもひしひしと感ぜられた。入学試験も無事済み、四月には入学式を挙げられ、新同志社大学には神学部と政治経済部と英文科の二学部一学科が発足した。神学部は前述のように既に大学組織になっていたので横滑りで私共は本科の最上級に編入された。角帽をかぶり得たのは神学部の本科生だけであり、袴に角帽という前時代の姿は今思い出してもまことにほほ笑ましいものであった。

いよいよ同年の五月二十日には大学開校式の華やかな行事が挙行さるる事となった。校内は式場のチャペルを始め物々しい感じで一杯であった。式場には長谷場文部大臣を始め、菊地枢密顧問官、大森京都府、知事、久原京大総長等、校友では徳富、宮川、小崎、浮田の大先輩方、その他外人ではグリーン博士等一流の貴顕紳士方が壇上に着席され、学生の目にはまことに壮観であった。その中で

われらの社長原田助先生の姿が一段と光っていた印象はまことに強く、式後学生連が誇らしげにその印象を語り合った事も忘れ得ない思い出である。式後校庭でラグビーの試合の外に今はなくなってしまったが同志社独特の勇壮な旗奪の競争が展開されて同志社学生の意気を見せた事もなつかしい思い出である。

最上級に移行したわれら九名の神学部学生は僅か一年だけの大学生活を終って、翌大正二年の三月には第一回の卒業生として社会に進出する事になった。五十余年を経た今日、キリスト教主義幼稚園教育の先達となった岩村清四郎君と仙台の尚絅女学校で宗教々育に一生を捧げている丸山吉永君と南洋のポナペ島伝道に従奉した田中金造君と小生の四人が生存している。一昨年のリユニオンの際、卒業五十年を記念するため同志社に会合して二日間生活を共にし、最後の夜は思い出の石山の三日月楼で一泊し、往時を語り明した事はまことに楽しいものであった。現在の同志社大学の真の発展を祈って止まないものである。

（女子大学名誉教授）

水崎先生のこと

森　中　章　光

明治二十三年一月、新島先生は大磯の百足屋旅館で「なお壮図を抱き」ながら永眠せられた。そして先生畢生の念願であった私立大学設立の大理想も、ついにその在世中に、残念ながら実現を見ることなくして終った。のみならず、先生の遺業同志社は、先生の死とともに衰頽の一途をたどるのみで、三十二、三年のころには「教室の天井は多く蛛網の鎖すに任せ、而して北寮西寮皆空家となりて人影なく、荒廃寂寥の光景惨憺を極めて、見る者、栄枯盛衰の感に打たれざるはなく……」（同志社時報第六六号掲・後の普通学校教頭波多野培根氏〃同志社普通部回顧十年〃）といわれているように全校の在学生は二百名にも足らない有様となり、同志社の運命はまさに解散廃校の寸前まで追いつめられたのである。

けれども、聖意をかたく信じて、明治八年に発足した同志社の大使命は、決して亡失したのではなく、地上を去った新島先生の精神は、なお門下のうちに生きてはたらきつつあったのだ。果せるかな、彼らの中から血涙をしぼって再起復興の難業にたちあがる愛校の志士が現れたのである。かくて、彼らの臥薪嘗胆、十年の苦心経営は、徐ろに実を結びはじめ、四十三年のころには、在学生七百数十名を数えるまでの発展を見るに至った。ここにおいてか、ようやくにして校の内外から台頭してきたのが、先師の大理想であった大学を、われら一千の校友によって、実現させたいものであるということであった。しかもこのとき、母校愛制しがたく、奮然と蹶起して、この問題に火を点じたのが水崎基一（同志社教授）古屋久綱（朝鮮初代総督伊藤博文女秘書官）三宅驥一（東京帝大農科助教授）諸氏のごとき、当時の中堅校友であったのだ。そして彼らは新島門下の大先輩徳富蘇峯先生を、まず陣頭に押し立てて、四十三年三月には、早くもその起草になる、あの名文章「二人同心其利断金」の一句に始まる堂々の趣意書を発表して、大学基金三十万

円の募集にとりかかったのである。

それから二年後の四十五年五月十日には、長谷場文部大臣、大森府知事ら多数の賓客を迎えて、待望久しかった大学開校の式典が、盛大に挙行されたのであるが、このスタートに当り、新設の大学に予科生として入学を許されたものは政治経済部七〇名、英文科一二名、神学部二一名、計一〇三名であった。

筆者はそのころ、普通学校の五年生であったが、開校式の夜、市の中央三条通り柳馬場の基督教青年会館で開催せられた記念大演説会には、弁論部の一員として光栄ある前座をつとめさせられたことを記憶している。いま往年の記録を見ると、開会の辞が経済科浅野恵二。弁士が普通学校森中。経済科富敦吉。神学部伊藤（現千田）民衛で、最後に浮田和民博士と宮川経輝牧師となっている。五十三年前のことを回想すれば、まことに感慨新たなるを覚える。

それにしても、この大学開設にあたり、基金募集のため一身を挺し、万難を排して、国内はもとより、遠く外地にまで遊説に出かけ、もって先師の遺志を実現すべく〃心を尽し精神を尽し、思を尽し力を尽し〃た水崎基一先生（後横浜浅野綜合中学創設）のことを、われらは決して忘却してはならない。

左に掲げるものは先生が筆者に送られた手簡の一部であるが、この機会にあえて公表して、先生の大学開設における大いなる功績を、更めて認識する一材料に致したいと思う。

水崎基一先生書簡

（昭和六年三月二十八日付）

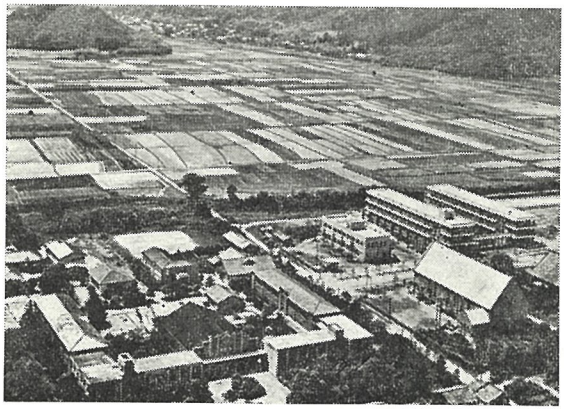
（前略）微力同志社の厚大なる奉公の誠を効す能はざりしと雖も、四拾壮時遠遊に上りし時に、勿論身命を賭し斯業大成せずんば先師新島先生在天の霊に対する能はざる覚悟は致し居候。御承知の通り性蒲柳、胃腸は普通より劣弱なりしを以て常にパンを携帯して、多くは同志社校友の家か、満洲朝鮮台湾の如きは時に小生の暫く教授したる、東洋協会学校卒業生の宿舎に泊り巡遊致し候。一度朝鮮路より満洲に入りし時は頻りに腹痛を覚へたるを以て、途次五柳背の温泉に二泊して休養したるが、此際前程図るべからざるを感じたるを以て、後事を友人古谷久綱君に托し、万一の場合に処するの計を致したる事有之候。奉天長春を経て営口に出でし時は、三宅駿二君同地に在り。爾来響導の任は同兄当り呉れ、天津北京等の滞在費用及汽車汽船賃は一切同兄負担し呉れ、今に同兄の厚情に対しては何の辞を以て謝意を表すべきを知らざる程に有之候。世間的の一割二割を募集費に当つる如き事なれば、募金も一のビジネスの如くなれども、小生の如き托鉢乞銭亦風流と申す如き画姿をヴィジョンとして邁進致し、中国各洲朝鮮満洲北清を巡旅して帰来、今井会計より実費を頂きたる額は七拾有三円位と記憶致し候。平生同志社の為めに計りて智慮足らず忸怩たる感強きもの有之候が、同志社の友人が小生を憐み同志社として基督教主義の学校に卒先して大学を設立し、一頭地を抽んずるに至らしめたるもの勿論新島先生不朽の大精神に依るなれども、又小生が此貧乏旅行にも幾分関係することを御諒知被下候はば、身に余るの幸栄と存じ候（中略）

大兄の如き、今や四十代に入りしか入らんとする方々に、何卒同志社の為めには貧を忘れ身を以て御尽粋被下候はば、必らず感応有之事と御諒知被下候事懇請至極に奉存候（下略）

（著述業）

岩倉を巣立つ

金田義国



同志社と離婚しました。去年の夏のことです。けれども、そこで生活したというリアリティは私にとってかけがえのない尊いものです。私がそこで育てられ、そこで十三年半生き得たことは文句なしに生活実感としての重みをもっています。離婚を決意したときは辛いでした。しかし、今はそうでもありません。外側から幾分客観的に、つまりシンドイ責任感なしに、昔の恋人をなつかしんでいることができるからでしょうか。

高校時代

なぜ岩倉の同志社高校を志願したのかはっきりしません。兄が一年上級としてすでに在学していましたし、私の父は同志社神学部の卒業生で、牧師ですから、恐らく二人の勧めによるものと思います。ゴミゴミとした大阪のH中学を離れて、岩倉に入学が許された時は純粋に嬉しかったです。第一印象は「市内といってもナント田舎だなあ」第二「女の子は少く、皆いばってやがる」第三の印象は二ヵ月経ってから鋭く私の心をゆさぶりました。「同中出身の連中はナント程度が高いんだろう」。最初の学力テストで百十番だったと記憶しています。このことは私にとって本当にショックでした。自分ではオレは賢いので、と信じ込んでいましたから。岩倉では一日一日が勉強との格闘でした。同級生には実に優秀な人々が沢山いました。彼らはコツコツと勉強し、受験準備に余念がありません。私も何の抵抗もなく、いわゆる灰色の受験勉強を始めました。先生方には実に魅力的な人

がいました。若い熱情をぶっつける人、枯れた味わいをもって迫ってくる人、トツトツとして自分の道を進んでいる人など。私は「ああ岩倉の先生になってみたいなあ」と心の底から憧れたものです。

二ヵ年半キング寮で生活しました。まるで軍隊生活です。上級生の命令は至上命令であり、いたいけな下級生は反抗心を噛み殺して絶対服従です。上級生には敬語を使い、名前も「さん」づけで呼びます。部屋の掃除、靴みがき、つかい走りなどイヤとは言えず、一生懸命させられました。時おり人間らしい温い思いやりを示してくれた人々もいました。が、私にとって最初の一年間の寮生活はまさに屈従に耐える生活でした。そして、二年生になった時からは当然下級生の迫害者になりました。これはナンセンスな、しかし不可抗力の働く悪循環です。私どもを支配していたイデオロギーは「秩序」です。けれどもこの「秩序」を破るのはいつも決って上級生たちでした。正直言ってキング寮の生活はイヤな思い出です。もちろん楽しいことも数多くあります。裏の畑から大根や甘藷を盗んできて、ワクワクしながら食べたこと、意中の恋人たちの話に徹夜で花を咲かせたり、食事が不味いと言って集団ボイコットをしたりしました。ギスギスした角のある人間だった私にとってあの屈従はある意味でプラスでもありましたし、生涯の親友を得たのもこの寮です。

高校三年の夏、大学進学の問題がいよいよ自分の切実な問題となりました。父に相談しました。「ボクは何にでもなれると思う。新聞記者にでも、実業家にでも、学校の教師にでも。一体何を選んだらよいのだろうか。」二人で星を眺め夕涼みしながら尋ねました。「人生はカケだ。あとは祈りなさい。」父の解答です。私には判っていました。――父はオレに期待している。伝道者になることを願ってこういうことを言っているのだ。――少々内的に闘いがありました。神学部入学の必然性はどこにもない。しかし、その必然性を自分のものとして選びとらねばならない。意外なことに、担任のH先生も、同志社マンのY先生も大変喜んで前途を祝福してくれました。級友の一人はしみじみと言いました。「お前、どうして神学部なんか行くのだ。」

中間考査・期末試験・学力テスト・模擬テストとテスト、テストでしめあげられた高校生活は卒業式のあと、T先生の「きっとここの先生になって貰いますよ」という謎の言葉で幕切れとなりました。

大学時代

修道院に入る決心で神学部に入学しました。そのイメージは見事にこわれました。嬉しかったです。そこには苦悩する若い魂がお互になっかしみ合いながら真剣に生きていました。個性のはっきりした尊敬できる先輩たちがいました。真面目と不真面目をつき合せたような得体の知れない人々もいました。最も愉快なことは、お互いにプライバシーを尊びつつ、しかも一個の人間として深い次元でぶつかり合う真の交わりを見出せたことです。

一般教養科目のクラスで大教室のマスプロ教育には当然反感を抱きました。そしてよくさぼりました。真面目に出席したのは語学と

体育だけだったと思います。大きな部屋でマイクを通して伝わってくる知識のキリウリには学生として反抗するのは当然です。要領がよかったのでしょうか。どれにも上手に及第点をつけて貰いました。教授の顔も知らないのに試験だけは受けたのです。もっとも、教授の側でも私の存在すら意識していなかったでしょうから。神学部の講義には比較的真剣に取り組んだと思います。講義の前には必ず短い祈りがなされました。ギリシャ語には悩まされましたが、いろいろな神学をいろいろな角度から学ぶことは楽しみでした。

同志社学生聖歌隊に入り、一メムバーとして懸命に活動しました。ここには此春寮と違った意味での安らぎがありました。歌うことと生きることが一面真剣に取り上げられ、皆歌うことにおいては一つになって美しい交わりが形成されていたのです。歌は下手でした。けれども「下手でもよい」という非論理的なヘリクツが大威張りで通用したグループです。私とワイフはこのグループでお互いを見出し、見出されたのですから、一種の恩義すら感じます。人々はこれをDSカップルと呼んでいます。ここで役員をやり、指揮者までさせられて、いろいろな楽しい経験、得難い体験を分ち合いました。私の大学時代と学生聖歌隊とは切り離せないほどの密接なつながりをもっています。

神学の味が少しずつ理解されてくるにつれ、私の内的苦悩も高まり始めました。二年生と四年生の時はとりわけスランプでした。いつもシンプルな問いと自身のなさけなさとが格闘していました。「一体信仰とは何だろう」、「オレは伝道者となり得るだろうか。まさに落第ではないか！」一定の期間、神の存在を一生懸命否定しました。「信じないぜ」と武装しました。「もう神学部をとび出そう」と何度も決意しました。しかし、このストラッグルは二つの支えにとって克服されました。一つは親友Hさんの友情であり、一つは母の病気です。Hさんは二人で御所を歩いている時言いました。「信仰とは生きることだよ」。母が狭心症で入院したと父から電話があった時、私は驚きと悲しみから受話器をおいてその場で祈っていました。「助けて下さい」。そして大阪へ馳けつける電車の中で笑えてきました。――ちょっと待てよ。オレは神の存在を否定していたではないか。だのに祈ってしまった。神に向って――。さわやかな笑いでした。母はしばらくの病院生活の後再び健康を取り戻しました。

大学院に入ってからは神学を選んだことに喜びを感じ始めました。新約聖書を専攻したのですが、とりわけ説教学の時間などは皆真蒼になって激論を交わしました。一つ一つの説教批判がそのまま一人一人の若い伝道者の「生きざま」の告白であり、抜きさしならない福音理解であったからです。私どもはそれぞれの教会で牧師さんたちの下働きとしてすでに伝道のチャンスをもっていたのです。卒業論文は半年かかってかき上げました。これだけは自分のものとなりました。卒業式直後、結婚式を挙げました。

思えば大学時代は私にとって苦悩と喜びとのミックスした飛躍の時代でした。文字でも作品ではなく、作家を読み始めた時代でしたし、人間関係においても、相手を人格として認め尊重し始めた時代でした。何でも経験してみたい時代でしたし、割に厚かましくいろ

いろなことをやってのけた時代です。キャンドル・サーヴィスのステージでふるえていた私と、結婚に反対していたワイフの父に「オレを見てくれ」と押売り式の訪問をした私とは二つの偽らない姿です。

また高校へ

伝道師の資格はすでにもっていました。同時に高校教諭一級免許も抜け目なく得ていました。食いはぐれないため――という普通の判断から教職課程もとっていたのです。大学院の時代すでに岩倉から呼ばれて講師を務めていました。薄給でしたが張りのあるよいアルバイトでした。もっとも最初は生徒たちからナメられて何度も動物的に怒鳴っていましたが。半年ぐらい経つと純真な彼らの中から何人か支持者が現われ、数えることのダイゴ味を満喫していました。今から考えるとノートを沢山とらせたり、説明の部分は早口で喋りまくったので時間の配分にバランスを欠き、本当に理解させるところまでゆかなかったことを申訳けなく思います。私が最初の講師であった時の高校二年生は今はもう立派な社会人ですから、きっと忘れていてくれるでしょう。ヤンチャ坊主たちがなつかしいです。

今度は正式に専任教諭になりました。恩師の先生方は同僚として温く迎え、対等に扱ってくれました。最初の社会生活に私は胸をふくらませていたのです。担任として、補導部として、また礼拝担当者としての校務分業にも忠実に仕えました。岩倉の教員会議は激烈です。一人の生徒の補導問題にも午前二時までも激論をします。そこでは教育の本質論が交わされます。私は最初あまりの真剣さにおののきを感じました。けれども、だんだんと発言するようになりました。一個の教育者としての姿を自分自身いかに誇らしく思ったことでしょう。

母校の教員として就職したと同時に、同志社教会でも一教師として伝道のお手伝いを始めました。教会では日曜日だけの奉仕に限られましたが、高校生のグループを指導したり、大学生の聖書研究会を助けたりしました。ちようど、その年は安保闘争の嵐が平常はあまり政治に関心のない私をもその渦の中に巻き込んだものです。大きな国民運動となったあの嵐の中で私も教職員組合の一員として、興奮してデモに参加したり、教会でも説教とならない平和演説をぶってみたりしました。自分では組合の闘士であったつもりです。

教壇に立って生徒たちの真剣な眼に見つめられた時は教えることに充実感を覚えました。情熱をこめて講義しました。三回以上続けると声が嗄れましたが、愉快でした。宗教教育の問題、無試験推薦制の問題にも同僚と共に真剣に取り組んだものです。岩倉は機構改革の後、実に民主的にすべてのことが運営されています。委員会、委員会で忙しがり過ぎるのは玉に瑕ですが、名実共にガラス張りの気持のよい職場です。とりわけ同僚の先生たちと時々一緒に飲みに行ったことは私にとってこの上ない働くことの喜びでした。アルコールがまわるとお互いに生身の人間としてブツカリ合えるのです。組合会議の席上ではなく、飲み屋で「仲間」を見出せたのですから皮肉です。皆さん本当によい人々です。そこでは審き合うこともなく、イデオロギーの

強制もなく、実存の破れをお互いにそっとかばい合えたことは私の人生経験の上にどれほどプラスになったか知れません。

二年目からN先生が精魂込めて育ててこられたホザナ・コーラスの部長兼指揮者になりました。最初はシックリ行かずまごまごしていましたが、慣れるにつれてメムバーたちを本当にかわいいと思うようになりました。彼らとは教師と生徒という壁なしに歌を通して一つになることができました。彼らは私の理想とするところまで見事に到達してくれました。三三五五と彼らはよく私の家に遊びにきました、ワイフも小さな娘も彼らの訪問を心から喜んでいます。退職した今でもメムバーたちは先輩たちを含めて、私どもに美しい手紙とプレゼントでしっかりと心のキズナを結んでいてくれます。本当に純粋な美しいグループです。

退職決意

生徒に「ライフ・ワーク」について講義しました。オレにしかできない仕事、かけがえのない生涯の仕事のことだ。どれか一つを選びとらないとダメ。君たちには何千という可能性がある。今からしっかり悩み給え。」私には三つの可能性がありました。一つはこのまま岩倉に奉職すること、二は牧師になって直接伝道に従事すること、三は音楽のタレントを伸ばして日本の「讃美歌」を改革することです。私はここではじめて「カケ」をしました。日本基督教団の正教師検定試験が行われた時、上京して友人たちと共に必死になって受験しました。——全力を尽して当ってみよう。もしパスしたら牧師になろう。だめだったら御旨だから生涯岩倉に務めよう。——パスしました。大阪の釜ケ崎で浮浪者と共に生活し彼らに伝道しているM氏の印象もその際私の決意を固めたものです。彼には自然に頭が下ります。もちろん同志社神学部の卒業生です。もう一つの動因は一人の生徒が卒業前しみじみと私に言ってくれた言葉です。「先生、キリスト教って一つの観念論ですね。」そうです。私は教壇でキリスト教について概念を説き、教えていたのです。その生命自体に彼らを触れさせることなく、美しく外核を与えるのみでした。キリスト教を利用して食っていた自分にイヤ気がさしました。私のカケは私を当然のライフ・ワークに馳り立てました。按手礼では直接伝道への決意を会衆の前で述べることができました。

岩倉を退職することは身を切られるように辛いでした。もはや、生活の保証はありません。生活権とか基本的要求とか言う着飾った現代人のスローガンの世界からは袂別です。私は同志社人として同志社に生きていたつもりだったのです。実は死んでいました。これから生きようと思っています。同志社を離れて同志社に生きることできると考えるからです。

思えば同志社からいろいろなものを沢山貰いました。やはり昔の恋人はなつかしいです。建物やシステムではありません。そこに「同志」がいるからです。大同志社ではありません。一人一人の先生方であり、友達であり、生徒たちです。私の退職を心から祝福してくれ、また涙してくれた人々が私にとって同志社なのです。私は十三年半も同志社で生活しました。短い結婚生活でした。

（校友・オベリン大学神学校在学中）